

Title	有栖川宮と飯田忠彦翁(第三巻第三號)の補訂
Sub Title	
Author	武田, 勝藏(Takeda, Katsuzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1924
Jtitle	史学 Vol.3, No.4 (1924. 11) ,p.160(630)- 161(631)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	餘白録
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19241100-0160

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

國が印度に自由を與へざりしことが暴動を惹起し、英國は高壓手段によつて之を鎮壓せしもその結果は、同教徒と印度教徒の接近となり、革命運動はますます内面的に深刻となりつゝある事情を説いてゐる。第六章「極東の變化」に於て筆を轉じて日本の勃興を説き、封建制度の本に鍛へられたる日本が明治大帝の偉業によつて統一的近世國家を形成し、更に國外に發展せんとして朝鮮半島に於て支那と衝突し、之を粉碎したる事情、並びにその結果として列國争ふて支那に利權を獲得し、時事を慨したる康有爲一派の革命派が新政をしかんまなせしも西太后を頭させる守舊派が之を拒んで武力によつて政權をとりかへし、ひいては拳匪の亂を惹起し、亂治められしのうちロシアが滿洲を占領して兵を撤せざりし事情を述べ、第七章「日本の覇權」に於てその結果日本が英國と同盟を結び、三十七八年の戦役に於てロシアの大軍を粉碎して極東の覇權を掌握し、ついで世界大戰に際しドイツの勢力を極東より追ひたること、然も戦後のロシア、ドイツの瓦解によつて最早日本との同盟を必要せざる英國が、ワシントン會議に於て日本を被告の位置にたしめ、山東半島を支那に還付せしめ、その海軍を縮少せしめ、英米の聯合に對しては明かに劣力に置かしめたること、しかしてアメリカが眞球灣に築塞せるに相まつて英國がシंगाポールに要塞を置かんこと、日本を假想敵國となしたる事が漸く日本人の眼をさまじめ、彼等は新たにロシア、支那、イスラムに接近せんとし内にも外にも事ある日にそなへはじめたりと述べ、かくアジアのヨーロッパ化は國民的自覺を促し、彼等はこぞ

つてヨーロッパに背叛せんとしつゝあり、今日アジアの主人なる英國は、ひゞりこの重大なる難局に處すべき運命にある、たゞ歐洲に於ても近東に於ても英國に裏切られたる佛國は、この責任を幸ひに分擔する必要なしと述べて結論としてゐる。

紛糾せる東洋の政局を深刻なる洞察力によつて批判し、之を極めて簡潔に叙述し去りたる著者の手腕には感嘆の外なく、東洋の最近世史を知らんとするものにきり好適の入門書として吾人はひるくこの良書を日本の讀書界に推薦するものである。

(大正十三年九月十七日 巴里に於て 松本信廣)

有栖川宮と飯田忠彦翁(第三卷)の補訂

(補)二四頁一行「忠彦は天保十四年九月より嘉永元年四月に至る迄で、足掛け六ヶ年は病氣靜養であつたこと云ふが、この間に江戸に赴き東叡山學寮に入つて博く書を讀んで居たので……」この時丁度東叡山の輪王門跡には當時韶仁親王の第三王子公紹入道親王が御門主として御出になつて居つた。それで忠彦は東叡山の學寮に入つて其藏書を閲讀して野史の史料を採取する事が出来たのであつた。同親王は弘化二年十月一日に薨去せられたのである。(弘化三年十月十九日發喪)三年四月廿五日に其兄宮である慈性入道親王が大覺寺門跡より移つて其の跡を承けられ、九月十三日に關東に下向せられた。親王は慶應三年十一月廿四日に薨去せられたが、非常に博學賢明な方で、熾仁親王の御伯父宮に當らせられた。

(訂)二二頁三行「知恩院門跡も亦同じく宮の御親類で、熾仁親王の王子慈性入道親王が御門主であつた」とあるが、尊超入道親王の誤であつた。親王は熾仁親王の第八王子で、享和二年七月十日に誕生、文化七年九月廿七日に知恩院に入室得度、嘉永五年七月七日に薨去せられた。(八月廿一日發喪)

(大正十三、九、十六 武田勝藏)

下橋敬長翁の訃報

本誌第一卷第三號(大正十一年五月)の附録別冊『維新前の宮廷生活』並に第三卷第一號(大正十三年六月)の『同補遺』を口述せられたる下橋敬長翁は、去七月四日腦溢血にて長逝せらる。實に驚愕の次第、謹んで哀悼の意を表す。翁は五攝家の一たる一條家の侍の家に生まれ、十二歳の時同家御側席に出仕し、其後裝束召具方を勤められ、慶應三年八月に嫡孫承祖で祖父陸奥守敬義の遺跡を相續し、間も無く明治維新となりては泉山御陵又は京都御所等に勤務せられた。退職後は兼て朝廷の公事或は故實等に通ぜられたるにより益々これが研究に没頭し遂に其の奥を極められ、又花辰月夕には和歌を詠ぜられ等して老後の日を樂しまれ、傍に京都櫻橋財團、平安義會の評議員等を務められて居つた。

大正十年の初夏上京せられて本會の外、臨時帝室編修局、圖書寮、國學院大學、史料編纂掛、維新史料編纂會、溫故會、明治神宮奉賛會等に於て明治維新前後の御所の模様などに就いて講演せられた。本會兩度の口述の節は午後一時より九時頃迄、纒々滾々

として盡きず、筆者速記者の手を休む暇さへ無く、其博聞強識には聽著一同の驚嘆した程であり、又筆記は兩回閱覽せられて其都度種々補入し、其熱心さには實に感服せざるを得なかつた。本會頒分の『維新前の宮廷生活』は恐れ多くも皇后宮の御目に止まり、大正十一年十一月京都市行啓の節には、翁は御所に召されて金一萬疋に紅白の御菓子一折を下賜せられた事等既に「同補遺」の「はしがき」に記述して置いた。

翁のこれ迄で諸所にて口述せられたものは大部分上梓せられて居る様であるが、就中本會印行の前記二書の外に、圖書寮の『幕末の宮廷』(大正十一年十二月)溫知會の『京都の故事について』(大正十年)等は人に多く讀まれたものである。猶維新史料にて數回にわたり口述せられ、且其速記を補訂してほど完璧に近いものが出来ましたが、不幸にして昨年の震災の節烏有に歸したので、翁は非常に其れを残念に思はれ落涙せられて居つた。

今翁の訃報と其略歴とを記すに當り、翁の講演當時を追想すれば、實に感慨無量である。翁は本年八十歳にて年には不足を云ふ程の事は無いが、明治維新の故實家として翁を失つた事は誠に學界の爲一大損失として惜むべきである。

○翁の和歌の二三

旭光昭波 波の上を照す朝日の紅にほひ浮べる四方海原
神 祇 新しき朱の鳥居に匂ふかな神の光と朝日子の影
社頭紅葉 夕日影にほふ北野の神かきは紅葉の色やてりまさるら
ん
(大正十三年九月五 武田勝藏)